

吉岡康暢著

『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕』

宇野隆夫

今日、中世はおろか近世の遺跡を発掘していても、奇異に感じられる人々は少なくなつた。しかし中世考古学の重要性が広く認識されるようになったのは比較的最近のことであり、今に至つたのは草創期からの研究を推進した諸先学の蓄積があつたことである。

著者の吉岡康暢氏は、石川県立郷土資料館・石川考古学研究会を軸に、北陸の地域に根差した研究を蓄積され、現在は国立歴史民俗博物館考古部教授としてさらに広い視野に立った研究を推進されている。

本書は日本海地域の中世陶磁を中心として、著者の基本的な報告と論考とをまとめたものであり、現在の研究の到達点また、著者の歴史的解釈を知りえる好著である。その内容を紹介し若干の意見を付すことによつて、日頃の学恩に報いることにしたい。

まず本書の構成の概略を示そう。

第一章 珠洲窯跡群の調査

1 研究の歩み

2 窯跡各説

第二章 中世遺跡出土陶磁器の様相

3 珠洲窯の成立・展開と生産形態

1 門前町鶴来と周辺の土器・陶磁器

2 港湾町普正寺遺跡の土器・陶磁器

付 鹿島町の土器・陶磁器

第三章 日本海域における中世陶磁の諸問題

1 北陸・東北の中世陶器

2 東播系窯と珠洲系窯―須恵器系中世窯成立をめぐる―

3 北東日本海域における中世陶磁器の流通

4 北海道の中世陶器

5 中世陶器流通の画期と地域性

あとがき

収載および関連文献一覧

本書の基本的な構成は、第一章が生産地の所見、第二章が消費地の所見、第三章が総合的な考察となつている。以下、順に要約しよう。

第一章1ではまず、一九五〇年の石川県珠洲市神社瓶割坂窯の発見にはじまる珠洲窯発見と研究の歴史について記述している。

現在でこそ能登珠洲窯は、中世東北日本海を代表する窯業生産地として周知されているが、その技術的系譜、壺・甕・すり鉢が製品の主体をなすこと、製品が北海道にまで流通することの意義に関する研究の進捗が、中世考古学発展の重要な一翼を担っていたことが判る。

2は生産地資料の詳細な集成である。窯と製品とについての現

在得られる知見が網羅されており、基礎資料として高い価値をもつ。また珠洲窯の製品の器種構成・技術・様式変化についての判りやすい解説が付されている。

3は珠洲窯の成立、生産形態の特質、終焉に至る動向に関する研究成果である。多様な視点から論じられているが、主な論旨を紹介しておく。

珠洲窯成立の意義は、一二世紀中頃に従来の生産地と離れた地点に突然出現すること、当初から製品の構成が壺・甕・すり鉢を主体とし水運を軸とする商品流通を目指していたことがあげられている。このことは東海地方の瓷器系陶器をはじめ各地の中世窯と共通するが、製品に権門・有力者の特注品を含み、尾張常滑窯と瀬戸窯の両者の性格を兼ねることに特色があった。そして編年と分布から、東北日本海岸に珠洲・珠洲系窯の広域商圏が成立したこと、同時にそれが商品経済の未成熟・隔地間交易という限界をもっていたことを示した。そして終末に関しては、一六世紀において越前窯にとってかわられる背景に、陶土や技術的停滞の問題ばかりではなく、在地構造の変容に基づく生産組織の変化をも考えるべきであった。

この珠洲窯の生産体制については、古代須恵器生産を含めて考察されている。すなわち古代律令制下の須恵器生産・流通に郡領級族長の関与を想定し、須恵器工人は特殊技能の伝習家族として把握され、商品生産者として自立することは出来なかったとした。そして九世紀中頃に降になると、この規制から自立しつづつあった富豪層の私富蓄積を目的とする窯業生産がなされるようになったとしている。そして珠洲窯に関しては、郡域を支配するような有

力在地領主が存在しなかったこと、寺社の関与の可能性は高いものの、過大には評価できないことを示した。そして珠洲窯の主たる経営者は小河谷を単位とするような有力名主(開発領主)であり、給免田受給手工業者・座手工業者のイメージとは異なる地域民の生活に密着した多角的な生産・流通活動を行なったものであろうとした。

第二章は、消費遺跡における調査・研究成果である。加賀一の宮白山比咩神社の門前町として著名な石川県石川郡鶴来町の遺跡群と、港湾町である同金沢市普正寺遺跡、能登半島の基部を扼する同鹿島郡鹿島町の資料について、中国製陶磁器、國産陶器・土器その他について詳しい記述がなされている。これによって集落や墓地という使用の場において実に多様な品々が使分けられていたことや、珠洲の製品が占めた役割を窺うことが出来る。また特に後者は、著者の中世海運研究の出発点ともなっている。

第三章は、中世陶磁器に関する5つの総括的な論考からなっている。

1 北陸・東北の中世陶器においては、珠洲・珠洲系陶器の製作技術と編年、東日本における須恵器系(珠洲系)と瓷器系窯の關係について述べられている。珠洲窯の技術的特色としては、半地下式窯における還元焰燻焼の良質の焼締め陶器であり、大型品では紐叩打ち成形、小型品は紐轆成形成が基本である点で瓷器系と異なること、櫛目文や叩きの加飾性に富むことは共通すること、製品に不特定多数を対象とする基本三種と少量の特注品が存在することを指摘した。特に成形技法の重要性が強調されている。

編年については七期に区分し、一二世紀中頃から一六世紀初め

頃に至る年代観を示した。この編年と年代は、現在、北陸の中世遺跡の調査研究をするものは誰もが最初に学ぶものである。

これらを基礎としながら、北陸・東北の中世陶器には日本海岸を主とする須恵器系・太平洋岸を主とする瓷器系・瓦器系に加えて、東北に須恵器・瓷器折衷系というべき一帯が存在することを示した。そして各系統の相互関係を検討することが、古代から中世への窯業の転換を位置づける上で重要であり、須恵器系を後進的とすることは出来ず、中世はこれら各系統の窯業に示される地域差が段階的に解消に向う時期であったと指摘した。

2 東播系窯と珠洲系窯は、東西日本を代表する須恵器系窯である播磨諸窯と能登珠洲窯について比較検討したものである。

播磨諸窯については、古代に生産の中心をおくもの(相生・志方・西脇・竜野窯)、一二世紀末以後に成長し中世前期前半の中で途絶えるもの(三木・神出・魚橋窯)、中世前期後半をとおして稼働するもの(魚住窯、一五世紀初まで)、中核窯周辺の一時的な小規模窯に四大別し、前三者が時間的空間的に変化しながら、專業化と広域流通を達成していく過程を示した。特に、一一世紀第4四半期における須恵器窯の中世的復興、一二世紀中葉における屋瓦の減産と器種別專業化指向および広域流通圏の開拓(準備)、一三世紀中頃における集約的生産と西日本一円への供給体制の確立を重視している。

能登珠洲窯に関しては、一一世紀に存続した須恵器壺・甕專業窯の工人が、皇嘉門院領若山庄の成立(二四三年)に示されるような庄園公領制の確立ともかわりつつ、一二世紀中頃に能登半島先端に再編成されて成立し、一六世紀初めまで操業する各段階

の様相を示した。

そして生産技術について、東播系甕が紐叩き打ち成形という点で他の須恵器系諸窯と共通するものの底部叩出し丸底仕上げという伝統を保持する点で特異であること、また宗教・奢侈的な器種や装飾性に乏しい点を強調した。これに対して珠洲窯のそれは、東海瓷器系窯の要素、瀬戸内の須恵器系の要素、独自の要素が複合したものであって、特殊な器種を生産し、加飾性に富むことにおいて対照的であった。

そしてこれらの背景には、東北日本海域においては珠洲窯の単一に分業圏が成立するのに対して、西日本においては様々の広域・狭域型の製品が相互補完的に併用されるという商品経済の展開度に規定されていることを指摘した。

また生産体制については、当初、庄官級在地領主が関与する庄園経済振興の一環としての性格が存在したことを指摘すると同時に、それより下位の直接経営者が主体性を強めていく過程を解明することの重要性を強調した。

3 北東日本海域における中世陶磁器の流通では、陶磁器の組成の変化を、三段階・6小期に区分した。

すなわち第一段階第1期(一一世紀後半)・二世紀前半)・中国陶磁が供膳器で一定量を占めるが在地中世陶器窯が本格的に稼働する前段階、第2期(二世紀中葉(後半)・貯蔵・調理器は地元産陶器、供膳器は手捏ね成形土師器と中国陶磁を主体とする当地域中世の基本的組成が定型化される段階、第3期(一三世紀)・龍泉系青磁碗皿・瀬戸系特殊器種が加わり、西部で加賀・越前の生産体制が確立する一方、東部で珠洲窯以外の須恵器系窯の淘汰が進

行する段階、第二段階第4期（一四世紀）…中国陶磁と瀬戸の品目に変化があり、珠洲・越前窯の量産化が進行し流通圏が北海道南部に及ぶ段階、第5期（一五世紀）…従来の組成に加えて、瀬戸系陶器と瓦製火舎類が加わり、珠洲窯の製品が片口鉢を主とするようになる段階、第三段階第6期（一六世紀）…珠洲窯に代って越前陶器が一元的に流通し、中国製品は染付・白磁を主とする段階である。

次いで、これらの流通の在り方を検討するため、沈没船と港湾遺跡について考察している。その結果、揚海（海あがり）陶器では珠洲陶器が卓越し、他の陶磁器は別途海上輸送された可能性があること、輸送形態が隔地間海運の展開以降も地廻り海運が併存した可能性を示した。また港湾遺跡の遺物が、一三世紀中葉前後を上限とし、一四世紀に急増し、一五世紀前半にピークに達した後、以後は遺跡によって異なることを示している。そして遺物出土量の増加は、中核港湾の成長、これを軸とする隔地間海運の発達を示し、その背景には閉鎖的な庄園経済から商工業者を主体とした商品生産への発達があったと指摘した。

またこれらの流通体制については、第一段階を在地庄領主や白山宮を軸とするような権門の海上権の掌握と地廻り海運、第二段階を中核港湾の問丸商人が活躍する隔地間海運、第三段階を朝倉氏庇護下の敦賀新興廻船業者（問屋制商業資本家）が海上権を掌握することに特色があったとした。この第三段階は、近世西廻り海運の先行形態として位置づけられている。

なおこれに付して、珠洲陶器の流通圏外に運ばれた5点の資料について示している。そしてこれらの資料も、個々に分析を加え

るならば、流通の全体像を考える材料となり、単なる例外として扱えないことを指摘している。

4 北海道の中世陶器では、北海道の該期社会を考察した。すなわち資料を集成し、珠洲陶器の器種構成が甕・壺・片口鉢の基本三種に限られていること、また分布が道南西部の館・港付近に集中しているが、中国陶磁と銭貨の分布はより広く、珠洲陶器の分布も広まる可能性のあることを示した。また越前陶器は少量であり、北海道が東北日本海域商圏の北端に位置すること、そこに直接的な政治的關係が存在する可能性もあることを指摘している。年代については、すべて一四世紀以後であり、過半のものが一五世紀に属することを明らかにした。そして当地域の中世食器組成が本州のそれと大差がないことから、和人ばかりではなくアイヌ村落にまで影響が及んでいた可能性を検証することが必要であると示した。そして一四世紀から一五世紀前半までの館成立と本格的な交易の開始、以後の和夷戦争期における商品経済の発達という二つの段階があることを示した。

5 中世陶器流通の画期と地域性は、生産技術と組織、流通機構の変化、地域的特質から、二つの大画期を設定したものである。すなわち第一の画期は一三世紀末から一四世紀前半であり、珠洲系窯における在地窯の淘汰と集約・生産地の拡散・器種の基本三種への限定、瓷器系窯における生産技術の一元化に示され、瀬戸内における播磨魚住窯赤根川支群への集約および片口鉢の量産化と対応するとした。また第二の画期は一五世紀後半であり、特定中世陶器窯が一元的広域流通圏を確立するとした。一六世紀の越前陶器がこれに当る。その製品は多くの器種からなり、惣村規模

の生産体制、朝倉氏守護領国体制下の統轄者、敦賀の新興廻船業者等の存在が示唆されている。またこれらは瀬戸内においては備前陶器の動向と対応するという。

そして展望において、中世陶器と中世土師器・瓦器との性質の違いを指摘した。そして後者の生産に中央権門の関与を想定する考えに対して、珠洲窯では法住寺白山宮のような在地有力社社の存在を重視すべきことを指摘し、日本海域や瀬戸内海域における生産・流通の地域較差を明確にするなかで、社会的分業形態や流通構造を明らかにしていくことの重要性を示した。

以上、本書の要旨を紹介した。表題は『日本海域の土器・陶磁』であるが、著者は珠洲窯研究を軸としつつ、全国的な動向を視野に入れた中世史の研究をおこなっていることが判るであろう。その研究方法は、資料の緻密な集成と編年・技術的分析を基礎としつつ、生産・流通・消費全般にわたる現象を解明しようとするものである。そして考古資料の直接的な分析にとどまらず、そこに表れた社会的な問題を深く究めようとする姿勢に満ちていることに本書の著しい特色がある。また著者は、本書収録の諸論考以後にも重要な論考を発表している。^{①②③}以下ではこれらを含めて、著者の多岐にわたる見解のうち主要と考えたものを再録して、著者の意見を付すことにしたい。

珠洲窯の生産技術については著者の論考につきるため、窯構造と焼成が須恵器の系譜を引く半地下式窯窯・還元焰燻焼であること、器種構成が壺・甕・すり鉢の3種を基本として若干の特注品を含むこと、成形技術は東海の瓷器系・瀬戸内の須恵器系・独自の三要素が複合すること、生産の後半の時期に生産地・生産器種

の集約がなされるといふ位置づけを再掲するのにとどめる。ただ一般的に古代後期(平安期頃)の窯は小型化の傾向をたどり中世の窯は大化していくことから、その転機と器種構成・成形技術の変化の関係を探ることが重要と思われる。具体的には一一・一二世紀の窯址調査が今後の課題であろう。ただおそらくは、一二世紀中頃の珠洲窯の成立が多くの点において画期的であったことは動かないものと予測する。

珠洲窯の製品の流通の変化についても、成立の当初から基本3種が商品として流通し、一三世紀後半ないし一四世紀以後に東北日本海域で独占的な地位を確立したこと、一五世紀には珠洲すり鉢と越前壺・甕が主流となり、一六世紀初め頃に珠洲の生産が終了したことが明らかにされている。現在、集落の調査が進展し、越前・加賀・珠洲・越中八尾・土師器すり鉢等の資料が増加しつつある。また珠洲の初現と終末期についての知見も得られつつあるが、基本的な理解の枠組みは大きく変わらないであろう。

評者が著者に、大きく教えられることは、以上のことに加えて、珠洲窯の生産・流通のシステムについての考え方である。従来、著者は珠洲の製品が京畿でほとんど出土せず、また生産地である能登半島先端部に郡域を単位とするような有力在地領主が存在しないことを重視して、珠洲窯業を庄園制経済の枠外のものと考え、刀禰・番頭級有力名主の多角的な生産・交易活動の一環とした。

また最近では、より上位の権力構造についても考察を深めている。そして注①論考では在地領主・有力寺社に関する詳しい分析を加え、珠洲窯中核支群である宝立支群の場合に、領家祈禱所法住寺・白山神社あるいは西方寺が焼山を媒介として統轄する地位にあ

った可能性が高いとした。

評者が特に興味深く思うことは、生産の基本単位が多角的かつ完結的な小経営体であるということである。その場合、製品の商品の広域流通はどのようにして確保されたのかという疑問も生じるであろう。そして本書第三章3及び注②論考において指摘されている白山宮の役割を重視したいと思う。中世前期の広域流通を保証したものは強力な権力ではなく、権門のネットワークと考えるからである。

井上寛司によれば、一〇世紀に端緒をもち一二世紀を通じて確立した中世諸国一官制においては、一国内の神社を格付けると同時に、一宮が軸となり中央国家権力網の一環を形成したという。井上は、この制度史的な研究を基礎として、中世神宮の祭礼・神事がいかなるメカニズムによって民衆をとらえ機能しえたのかを明らかにすることの重要性を指摘している。そして評者はその一つの理由として、著者のいう「民間必需の非自給物資」流通への関与を想定したいと考えている。小規模な生産者が弱小な神社と関係することが、東北日本海域の海運網に乗ることにつながった。東海の瓷器系・瀬戸内の須恵器系・京都の土師器の技術導入の回路を得ることもなりえたのではないかと想像するのである。権門と直接経営者の関係としては、直接経営者が白山宮神人の身分をもつことが想定されている。ただその具体的な関係はどのようなものであったのであろうか。評者は、西法寺に近接して珠洲陶器を用いた中世墓地が成立すること等からみて、その必要物資を貢納することを見返りにして、大多数の製品の生産・流通に関する自主的な活動を保証されたのではなからうかと考える。こ

のように見るならば、中世前期畿内の土器作り手と、さほど変わらない方式を想定することになる。

この反面、畿内と異なると思う要素は、畿内の土器作り手が多分に專業的（分業的）であるのに対して、珠洲窯のそれが多角的と指摘されることである。これは古代以来の伝統に根差す重要な相違点と考えられる。ただそのいずれが進んだ方式であるかは簡単な問題ではないと思う。評者は、畿内中世の伝統的な分業的生産体制は、根強い土器生産の存続に見るように保守的な要素であり、それを克服して近世的様相を形成するには畿外からのインパクトが必要であったと考えている。

先述の通り、著者は東北日本海域の様相を太平洋岸や西日本と比較して、汎日本的な研究を行なっている。評者も常にその研究の成果と姿勢に学ぶものの一人である。ただ珠洲窯の性格が後進的な須恵器生産とはいえないと高く評価される反面、東海の瓷器系や播磨須恵器生産に比して、分業体制が未成熟とされていることに若干の疑念をもっている。

先に示された通り、その生産単位は多角経営的な側面を有していたであろうが、製品が独占的に商圏を確保する様相と、多様な製品が競合・補完する在り方のいずれが進んでいるのであろうか。評者にも解答の用意はないが、北陸の集落資料においては中国製陶磁器・国産陶器・土器および漆器や鉄製鍋釜の中世的器種分業が、畿内や瀬戸内よりも早くから明確な形で貫徹しているように思う。そして中世の地域性は、土師器・瓦器生産が卓越する畿内と尾張瀬戸施釉陶器生産を独特の様相とし、東海・北陸・瀬戸内がそれぞれに独自の様相をもちつつ相似た水準で中世的に転換し

た可能性を考えたい。

著者の考えの現在の到達点を示すと考えられる注②文献においては、一世紀中頃と一六世紀末〜一七世紀初葉を中世の始期と終期とおさえた上で、三段階6期に分けて記述している。そして権門による海上権の掌握、中核港湾を拠点とする問丸商人の活躍、朝倉氏庇護下の敦賀新興廻船問屋の海上権握掌という三段階区分は、日本海域の中世海運史を考える上で、非常に重要な視点を与えるものとして高く評価したい。なお畿内・瀬戸内の場合には、南北朝期を境として中世前・後期の二段階に区分する方が理解しやすいところがあり、著者の示す通りその展開に差があった可能性があろう。そして評者は、その差をむしろ、日本海域の方が中国製陶磁器の流通が目立つことと関係させたいと考えている。

ところで土器・陶磁器の中世的特質を一言で表現するところのよくなるものになるのだろうか。著者は中世陶器の特質を「民間必需の非自給物資」の生産にあるとしている。これを評者なりに理解すると、中世社会を考察するに際しては、民衆と流通という二つの視点が特に重要であるということのように思う。現在、評者はこれを敷衍して中世を「商工業者が権力に対して相対的に自立性を高めた時期」と表現したいと考えている。このように著者の研究に導かれたつつ、評者は中世初期に食器生産が瓦生産と分離し專業化していくこと、および近世初期に城下町の形成と軌を一にして新たな生産・流通体制が編成されたり、瓦生産体制が復活したりすることを重視したいと考えている。またその間の変容過程についても著者の戯尾に付して考えていきたいと思う。

以上、著者の説を紹介するとともに、若干の蛇足を付け加えた。

ただ吉岡氏の考察は、緻密であり、慎重な表現が多い。本稿では書評という性格から、著者の考えをかなり単純化して要約したため、重要な論点を捨象したり、本来の意図に反して評した部分が多かったのではないかと恐れる。中世考古学に興味を持たれる方々は、是非、本書を熟読し、著者の考えを直接に理解して頂きたいと思う。そこに日本中世考古学の到達点と今後の可能性とが、端的に示されているからである。

- ① 吉岡康暢「中世陶器の生産経営形態―能登・珠洲窯を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二集、一九八七年。
- ② 吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一九集、一九八九年。
- ③ 吉岡康暢・小野正敏・水野九衛門・田中照久『東日本における中世窯業の基礎的研究』一九八九年。
- ④ 井上寛司「中世諸國一宮制と地域支配権力」『日本史研究』第三〇八号、一九八八年。
- ⑤ 脇田晴子「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、一九八六年。
- ⑥ 北陸古代手工業生産史研究会『北陸の古代手工業生産』一九八九年。
- ⑦ 前川要「織豊期における瀬戸・美濃窯生産技術の地方伝播」『美濃の古陶』第三号、一九八九年。
- ⑧ 久保智康「近世中〜後期越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第七号、一九八九年。

(A5版 三七七頁 一九八九年一〇月 六興出版 三五〇〇円)

(富山大学人文学部助教授)